

荻原豊次保温折衷苗代 講演

昭和63年11月28日

於 中央公民館

武田の残党で甲斐から来てこの地に落ち着いたと伝えられているが、明治後期没落した折、借金のかたに家財道具を持ち去られた時の長持ちの中に系図等の書付があり、持っていった方も自分に関係のない系図を持っていた（中軽長谷川氏）という事で荻原姓の、ある人の手に譲ったと聞かされている。

修験者として江戸中期、群馬県渋川、錫杖山普門寺で密教の修行をし、渋川真光寺の住職等もしており、墓石によると権大僧都、大阿闍梨、法印等の銘が刻んであるが、辞書等によると「高僧に贈る称号である（法印とは僧正に相当する最高の僧位）」と記してあるが3・4年前NHK放送を見て驚いた。大阿闍梨というのは、生か、死を境にした、大修行を成し遂げた者に与えられる称号で、20年に1人出るか、出ないかという偉大な人に与えられるものであるという。千日回峰（一日40里ぐらい山の尾根道を、毎日踏破する、飛ぶようにして廻らなければ寝る間もない）という行を行いそれで身体と、精神を鍛え、その後食を断って堂に籠っての生死極限大修行を成し遂げる。…これ等の人が4人も居る、4代に及んでいるのはあまり例の無い、優れた家系だとも言われています。

これは墓石、及び神殿で焼け残った、漆塗りの木箱に入っていた免許状で立証されている。院号を不動院といい、3代前位の人には千ヶ滝で修業していた、と言う話は祖母から聞いていた（青木の葉に呪文と、年齢、名前、を書き、竹ずつ、に栓をして封じ込める、虫封じのおまじない等を行った、近郊から大勢の人が来たようだ）。

古宿古屋の不動院、と言われ、兎に角変った家系であった。

神官職は、明治の新政府に入って廃仏毀釈令からと思う、僅か2代で終わっている。明治期に入って、多分碓氷の新道、鉄道開通後であろうと思うが、北上州と言う所は、今でこそ高原野菜の大産地であるが、当時は交通の便には、閉ざされた所で、米は全然取れない、稗か、粟しか取れない生活には厳しい所、幼いころ聞かされた古老の話では、病人が出れば、竹ずつに米を入れ病人の枕元で、「ほれ、米のご飯だよ」と振って見せたといわれるくらい、米なぞ貴重で食べられなかった所であったという。

現在浅間の裏へいってみ見れば、日本の土地はこんなに広がったかと、思われるほどの広大な裾野が広がっている。この広い土地、昔は生計をたてるのには、山仕事それも炭焼き位のものしかなかった。（それも炭を焼いても近くでは売り場が無い）交通便の早く開けた、中仙道沿いまで運ぶより方法が無かった。

屋号を大和と言い、手広く炭商いを行った。北上州から付け込む炭を関東へ中継したものと思う。売り掛け帖等を火災で焼いてしまったため、残念ながら規模等は知ることはできない。

古文書的なものは普通人には簡単に読めなかったし、豊次にはそんな余裕もなかったろうが、養蚕に夢中で、私の子供の頃は家中、蚕で一杯で家族の寝る所も無かった、神殿の前に2坪程の物入れがあり、古文書、古書が一杯入っていた。当時祖母は大事に夏の虫干し等、行っていたが、その祖母も亡くなり、そんなものを大事にしているより、少しでも余計に蚕を飼った方が経済的だと、考える豊次は縁側一杯に出された和紙を、屑屋に売ってしまった。おとなしい長姉が、そのときは父親と喧嘩して売らせまいとしていた事が、幼かった白分の記憶に残っている。あれが残って居たなら、古い歴史がもっと詳しく判る事ができたのではないかと思うと残念である。

父能均、母すぐ・・・6男1女、七福神家族であると言われ、豊次は末っ子として生まれる、長兄寛治とは14歳の差があり、長兄の少年期、青年期初期を迎える頃は、家運隆盛期であり、当時高等科は岩村田まで、行かなければならなかったが、それを卒業し、島崎藤村の小諸義塾に学び、文学青年として藤村から将来を嘱望されていたとも言いが、豊次が小学校に学ぶ頃は没落してしまい、小学校卒業がやっとということでした。寛治の少年期とは、雲泥の差があった。

家運の没落は横根の酒屋に受印(連帯保証人)をして、その酒屋が酒造りに失敗、倒産のあおりであると言われていますが。

火災の時一つだけ持ち出した大引き出しに、奇しくも借用証書があり、当時の悲惨の様子を偲ぶことができる。厳しい取立てに多くの田畑、山林、家屋敷全て抵当物件として、一時は現在の家に住んで居られなかった・・・借り人が父親能均、連帯保証人が子の潔で、受け人に成って貰える人も無かったのだろう、返済期に迫られても金策付かず、他所から借り受け一時しのぎの繰返し、利息に利息を呼び最終的には元金の三倍にもなっている。

人生不幸が重なるときは、追い討ちをかけられると言われるが、長生きだった祖母(くに)が死に次々に兄弟の国太、茂作、ウメジ、浪重、父親能均と葬儀続き、葬儀が出せたのかと思われるほどの悲運にあっている。

祖父能信が亡くなった時は家運最高るときといわれ、葬儀には樽酒を振舞い、峠の神官が総出で笛太鼓、でと、語り草にされる程の盛大な葬儀であったというが、没落後は寛治も勉学どころではない、塩壺温泉を発掘し、家運挽回へと焦って見ても、所詮どうにもなるものでもない。発掘技術の進んでいない当時、鍵を落としてしまい其れを引き上げられず、それが致命傷という事で最終的には、星野に身売りする結果となる。身売りと言っても借金を重ねてきた後の事ゆえ、残る金はいくばく

もなかった事と思う。

豊次は小学校を終えると、兄夫婦寛治の元へ身を寄せ、其処から製箱工として、星野の製材工場で働いた。元もと身体が小さいのに、12歳のときだったというので、踏み台を作って貰って其れに乗って作業を行ったという、新潟の石油の、石油缶を入れる木箱であったというが(その、木取りを、一定の寸法に纏めるため、なるべく無駄を出さず効率的に行わなければならない知恵、瞬時の判断のいる仕事であった。…当時古宿からも一人前の大人が通っていたという、1日の日当50銭、併し豊次は箱の板の取り方が上手い、ということで其の人達より多く35五銭であったという。

兄寛治の妻は、群馬県松井田宿の芸妓置き屋の、一人娘であったと言われており幼い、豊次に飯を炊かせて働きに行かせても、気にするような人ではなかったという厳しかった自分の歩んだ道を、余り語らなかった豊次であったが、このときの辛さ、また製板で人より多く、賃金をもらった嬉しさは、忘れられなかったと見えて時々話にした。

苦しかった当時の昔話は、母親のほう詳しく語ってくれた、没落した荻原家を継いだ次男潔は、地主の子として少年期は過ごしたものの、没落騒ぎのさ中、日露戦争に出征右足貫通銃創を負い広島陸軍病院に入院、退役後苦労の連続であった。潔が荻原家中興の祖であるとされている。

潔は、少年期は地主の子として作男等による農業、自ら手を下すこともなかったろうに…、

一転

小作人百姓、養蚕をやれば繭の繰り返し、農閑期には、嘗ては、家で居弁慶で、北上州から炭など運ばせていた者が、今度は自分が使われる身となり、運送を引き、浅間の裏まで稼ぎに行く事と成る、吾妻まで行くので朝の暗いうちから出て行き、夜遅くならなければ家へは戻れない。…「トラノ」は子供に恵まれない潔の養女として育てられたが、寝ている留守に仕事に行き、帰ってくるのは寝てから、ということで父さんの顔を見たことが無かったという。

又当時の生活は皆苦しい時代であったが、その日稼いで来る賃金を待っていて、その日の米を買いに行かねばならず辛かったと言う。

万屋(荻原の系統、米屋をしていた)の宗次郎爺さんが「トラ」気を付けて行け、と風呂引き包みを背負わせてくれて、親切に橋を渡してくれたという、テレビドラマ「おしん」の時代そのものであった。

潔は自分で農業をやってみたが、小さいときから身に付けたものではなく、途中からのものであり、何をやっても旨いかない、そんな事もあってか、基礎的知識を身につけなければと、貧しいながらも、弟豊次には、東京、中野の蚕糸養成所で学

ばせる、その後豊次は家に帰って兄潔の農業を手伝うこととなる。

大正3年、初めて村に電気がついたときは、「ありがたいもんだ、えらいもんだ」と驚き、電気の仕事につきたいと考えた。

併し、次兄潔は、豊次に百姓を止められれば困るので「危険だからよせ」とゆるさなかったという。

大正4年は全国的に好天に恵まれ、米価が暴落した年でもあったが、軽井沢でも此れまで10アール当たり3俵そこそこの収量であったのが4俵も取れた、次兄は大喜びだった。ところが豊次は「小作料に半分かればいくらも残らない」といった。ご機嫌だった次兄は「お前は、何も、わからないからそんな事を言うんだ、これ以上収穫を上げられると言うなら、お前がやってみろ」・・当時でも隣の御代田まで下れば、倍近くとれるのを豊次は知っていた。

地主から小作農に急転し嫌気のさした次兄は、土地会社へ勤めにでてしまった。

こんな、いきさつから豊次は農業を継ぐこととなったが、若いころから痩せて小さい身体で、体力に任せての百性はできなかった。現在のような農業書があるわけでもなく相談相手の技術者も居ない、全て自分が頼りであった。肥料も堆肥か青草ぐらい、硫安などの科学肥料などまだ無かった。最初に硫安を使ったときは、はるばる東京の肥料問屋から取り寄せた。妻トラノ、の父親は「其れくらい撒いて効くものかい」と言って、取れ秋にはわざわざ隣村から見に来た。石灰窒素が出たときは直江津まで行って、2袋買ってきて使ったと言う、この研究熱心から次兄も驚くほどの、収穫を上げるようになっていった。

又現金収入をあげる為蚕も飼った、大正時代、年7回の掃き立てを行い既に床下の土室で、幼齡飼育を始めるなど、画期的な養蚕技術を編み出していた。養蚕は3・4齡期になれば広い飼育場がいるが、1・2齡期は僅かの場所があればよい、飼育場所や労働力の関係から一度に大飼いができないので、この方法で回転効率を上げ年間多くの養蚕を行った。

一般の人は上族してから次の、はきたてを行う、豊次の家では、次から次へと同じような蚕が蚕室に飼育されており、村の人たちは魔法使いのようだといっていた。

戦後、土室稚蚕飼育方法が行われたが、この技術の原理は、ずっと以前に豊次が行っていた。蚕は基礎知識を得させて貰っていた関係からか、常に上繭を生産し太平洋戦争中は屋内では飼いきれず、露地一面に飼ったという。……戦時中物資の不足時代を物語る、粗末な紙の賞状がある。

後年、農協及び町等の役職も多く、家がどんなに忙しくても、家のものの知らぬ間に会議に出て行ってしまったものだったが、養蚕期には不思議と欠席することがあった。太平洋戦争の頃当時村ではあまり養蚕する人が無く、村中の桑を集めて

蚕を飼い二人の女の子は、朝から晩まで桑集め、地下足袋を脱ぐ間もなかったという。

豊次は保温折衷苗代で表彰された時、自分は稲で表彰されるより養蚕で表彰されたかったとさえ言っていた。

体力と腕力は農業には欠かせない当時、恵まれない身体を補うために、野菜栽培等でも、まだ誰もが行っていなかった畜力での除草、倍土をおこなった、…村には気むずかしい古老がいて畑のふちでじっと見ている、畜力ですので、馬が足で作物を踏み潰してしまう事かおるのを、苦々しい顔をして…能無し者めが、と言わんばかりに…当時の農民の意識なんてものは、其れが当たり前のことであった…一般が畜力を取り入れたのは戦後である。動力脱穀機をいれたのも当地方では一番先である。(三軒の共有で、新潟からの中古品、エンジンが止まってしまったときなど当時は機械に対する知識も乏しく、通る自動車の運転手さんを頼りにするより方法が無く、待っていても車は当時は中々通らない、…人足はいても仕事にならず、只気をもみ待つだけ、苦勞した笑えないエピソードがある)

保温折衷苗代が全国に普及し始めた頃、地元の信毎は勿論朝日、毎日、経済、始め中日等、地方新聞社、農業雑誌社からの取材がありました。

まず最初に聞かれる言葉は「発案の動機は」ということでした。…答えは…

恵まれた暖地に生まれていたならば平凡な農業で…終わっていたかもしれない、自然に恵まれない寒冷地に生まれ、そこで農業で生きがためであった、一粒でも余計に取らなければのひと言であったわけでした、それには一目も早く田植えをし、もう少し余計取れる品種を作ること、春が遅く冷たい湧き水利用、加えて漏水、何時も冷たい水がかかっている、そもそも苗代を水で覆うということは水で地温を保護する為のものである。その水が冷たい、地温も上がってきていないでは、苗作りは容易なものではない。その土地土地で生まれてきた人は自分かちの土地の気象条件、自然環境等に合ったものを、永い経験から割り出した、「此れしかない」この方法以外ではこの土地では出きないのだ、という鉄則によって行われているのが、その土地での播種期であり、在来種であったはずである。それを早く種をまく、品種も変えるということでは、苗立ちが悪くなるのは当たり前の事であった…豊次のやること成すこと失敗の繰り返したった。「稲の生育限界温度が12度だなんて事全然知らなかったもので」と後である雑誌記者に述懐していましたが、…兎に角、苗を違える…材の古老からはあのうち貧乏したが、頭の狂ったのが出てきて、何をしでかすか解らん、苗作りもろくに出来ないものが、米作りが出来るわけが無い、どうして喰っていくのか、と笑いものにされていた。偶々野菜の温床苗代に零れ落ちて、「すくすく」伸びていた稲の苗にヒントを得て、苗代を保温する事によって苗立ちを良くする、…其れによって増収を図ることを思いついた。…

其れが、昭和7年であったと言われている、・・翌年一反歩分を行ってみたら水苗代に比べて38パーセントの増収であった。此れに自信を得て翌年は160本の障子を、高崎から買い入れ自分が耕作している水田一町歩分の苗代を作った・・・資金が足りないので次兄に相談すると次兄も快く協力してくれた。畑に160本の障子がずらりと並ぶと、実に壮観であったと言われているが、当時それ程余裕もない農家が、思い切った事をやったものです。

初めは苗もスクスク伸びた、ところが途中で生育が止まり、あちこち枯れはしめた。急いで長野の試験場に原因を聞き行きましたが「そんな事、したことがないから判らない、ボルドー液でも掛けてみたら」言うことであった。ボルドー液で消毒したが、立ち枯れは止まらなかった・・苗不足になり半分しか植わず、頭を下げて苗を貰い歩いてやっと植えつけた。この年は冷害で、水苗代の稲は半作であったが温床苗は平年作であった。

温床の収量の上がることが判ったので、その次年は立ち枯れ病の出る前に、水田に仮植をして、それから本田に植えた・・(此れは田植えだけでも大層なのに、我我に言わせれば気の速くなるような話であった。)・・仮植えには莫大な労力がかかり色々、苦心の末水田に板囲いをし油障子を掛け、苗が5・6センチになるまでは、踏み切り溝にのみ木を入れ畑苗代の状態にしておき、それ以上に成長すると灌水して、水苗代状態にして立ち枯れ病を防いだ・・・「これが保温折衷苗代の原型となる」

併しこの苗代は家族にとっては大変な労働であった3月の彼岸ともなると、障子張りが始まる、昔の農家は勝手が広い、板の間へ障子を持ち込み油障子張り、油紙ですので糊が良く付かない

棧一本一本を、のしごてで押さえ、なすらなければならない、手間のかかったものです。私は幼かったから見ていただけですが、姉たちは大変でした。又苗代を作ってから、春先雨の日の後など必ず大風が吹く。つむじ風等には障子を山のとんでもない所へ、吹き飛ばされ、裂かれてしまい、明日はその修理と・・、夜中に箆を持って行き応急処置をするといった苦労が絶えなかった。この苗代を続けながら、昭和12年ころから群馬県に委託苗代を試みた(此れを始める動機には、エビソートがある村の外れに精米所があり、荻辰さんがやっていた、当時は水車ですので石臼で、

コットン、コットン長い時間をかけて石臼で精米していた・・「どうも、この米は違う、艶も違うし、粒も揃っている。貰って食べてみろ」とは、聞こえは良いが、ハッキリ言えば盗んで食べた。

「豊さん、実は、これこれこういう、訳で、あんなうんめえ(美味しい)米、食べたことがねえ、どうやって作るだい。」、・・・軽井沢では晩生種で作れないとされていた、陸羽132号であった。

「普通の水苗代では駄目だ。此処では温度が低くて苗がうまく立たないし、早く植えなければ実が入らない、温床でやるか、暖かい所で苗を育てて貰わなければ無理である。」・・・

「どうでしょう、群馬県の横川辺りで苗を作ってもらい、家の車で運んだら」(車など無い時代だが、荻辰さんは天然木の製造を行っていてトラックをもっていた)

早速群馬県に出かけ、此処まで来たんだから松井田まで足を伸ばしたほうが、苗代条件のよい田んぼが有るからと言うことで、日当たりの良い川原に水田を探し、苗代を委託することになった。ところが苗立ちは良く、其の上うまい米が食えて米も取れる、という事で、町と農業会とがこれを知り、町の農家に広め軽井沢町から群馬への委託は急激に増加していった。当地と松井田では、峠を一つ越えただけで、一ヶ月以上の温度差がある、苗は楽々出来る。戦時下であり食糧の重要なときであり、沓掛駅(中軽)へ急行も停まってくれたと伝えられている。支那事変が太平洋戦争と成り、食料がだんだん不足するようになる、軽井沢からは毎年委託苗代を頼むものが増える。最初は喜んで受けていた群馬県側が、裏作の麦ができないの、どうのこうのと、余り委託を歓迎しなくなってきた、向こうの人も悪気があるわけでは無いが、向こうの農家は自分達の苗作りは我々の委託する時より、一ヶ月も遅い、向こうで五月と言えは気温も水温も十分上がって来てからの、苗代作りであるわけで、そんなに神経使わなくも立派な苗が出来る訳で、である。ところが、こっちでは一ヶ月早く頼んである、まだ気温も水温も上がってきていないのに其の認識がない、どうしても自分達の慣例の感度で苗代管理を行ってしまう。まだ気温も水温も上がっていないのに、水は掛け流しにしても平気であり、暖かい日には浅水にしてくれれば、確りした苗が育つのに、まるで、無頓着、水口は青み泥でひ弱な苗となってしまう。・・・河原に田ん圃を借りたはよいが、場所によっては水の滴る苗を、車の通る道まで背負って高い堤を超え運ばなければならない、大変な苦労があった。・・・

古宿という集落は農閑期は稼業で馬力(運送引き)の多く居た集落であった。戦時中、貨車事情が悪く輸送が出来ないときがあり、其れではその馬力で運ぼうということになり、運送で持ちに行った。当時の碓井峠は曲がりくねったガタガタ道で、荷物を付けての、上り道、加えて夜中には霧が巻き一寸先はわからない、一歩間違えれば千尋の谷「オーイ、オーイ」と声をかけあつて命がけで上ってきた・・・あの碓氷の長い道程を。・・・余り永い時間荷造りしたままで置くと、発熱して苗が弱ってしまう。こちらでは苗を早く広げて、蒸れないようにして置かなければならなく、苗の届くまでは安心できない・・・大変なことだった・・・。

群馬側の苗管理も、年々悪くなり、輸送事情も困難になってくる。

やはり自分の苗は自分で育てなければ、・・・自分が続けている温床苗代がもっと、簡単な方法は無いものかと、・・・此れが常に豊次の頭の中にあつた。電熱苗代

も試みた。経費がかさみ比れも駄目。

偶々油紙を直接苗床の上に被せた。・・此れが保温折衷苗代の始まりです。

誰が考えても常識外のこと、紙をぺったりとかぶせられて、苗が伸びる筈が無い。処が自然界、植物の生命力とでも申しましょうか、数の力、ムクムクと紙を押し上げ成長してくる、豊次としても全く予想だにできなかった、驚異の発見であったらと思う。

後に広く新聞、農業誌に取り上げられ紹介されたとき、・・・誰もがこんな馬鹿なことをして、と半信半疑でやってみた・・「当時最初に行った人の体験談、報告紙には、一様に書かれています」、処がゾックリと、栗のえがのように生え揃った緑の苗を見たとき、魔法か手品にかかったようだったと表現している。

併しこの苗代も完成するまでには、・・太平洋戦争突入と言うことで、紙に塗る油もままならない。車の抜きオイルを塗って失敗したり、前の年、土と紙の間にかける焼き粃殻が途中で不足したので播かないで行ったが使った所とあまり差がなかったのも、次の年は使わずに行った。そしたら、その年は気候不順の年で、雨ばかり降っていて雨のため土と紙とが密着してしまい種粃が腐ってしまった。・・そのとき村の人に勧めて作らせていた関係上、その人からの不足苗まで心配してやらなければならなかった。母方の叔父はよく冗談話に。

俺は人のものは取ったことはないが、このうちのお蔭で夜中に駆り出され苗泥棒に行かされた・・・と、言うのはこのような天候の不順の年には、決まって全般が苗不足を来たしていて、相互扶助の精神で苗止めの(余り早く植えてしまうと苗が余計足りなくなる)申し合わせをする等し、また特に違えた人には自分たちの植える個々の苗も、出来るだけ儉約して田植えをして分けてやる・・辛苦の多い厳しい自然の中で生きてきた、農民の共に生きる為の生活の知恵ともいえる、素晴らしい習慣があった。もし自分が違えた時は誰かに助けて貰うんだ。・・・苦労して作ったどんな貴重な苗であっても、決して金銭計算はしない、田植えが終わって農休みの時に「重労働だった田植え期に、終わった時休養する行事」、赤飯の一重も届けて感謝の印で済ませれば、それでよかった。今はその様な麗しい風習は忘れられていく時代の流れでしょうか。

苗不作のときは、村内の苗だけでは間に合わず親類縁者を頼ってお願いしなければならない。その家も苗の当たり年ならいざ知らず、気象条件の悪い年には必ず近所の人も足りないと言う時がある、私のうちへばかり呉れられない「どこどこの隅に纏めて置くから、夜、そっと持って行くように」と言われるわけで、夜中慣れない道、勝手知らない所故、川には落ちる散々の呈で、人にきづかれないうにもらってくる。いわゆる、叔父の言うこれが苗泥棒である。

苗を違えるのは毎度のこと、地元では間に合わず遠く、馬瀬口、中込辺りから貰って来たことがあり、向こうは暖かい所、この苗では軽井沢では無理だろうと言わ

れても、そんな事を言っていられない、兎に角水田を塞げない事には(併し此れがきっかけで、新しい多収穫品種導入を知る事となり、意欲的にとりくんでいくこととなる。)

初めはこの苗代も近在の人だらけ、豊次の失敗ばかりを目の前で見えていたので、取り付こうとするものが無かった、当時、高冷地委託試験で試験場と、交流があった、諏訪の原村に高冷地稲作試験地があり、三浦という技術員がおられて、此れは面白い方法ということで(間もなく亡くなってしまう)、諏訪の農家に勧め、荻原式苗代と言う事で地元より諏訪の人たちが主にやっていたと聞いています。

文献によると昭和6, 7, 8, 9, 10年と冷害が続き、特に10年は大冷害で高冷地及び東北地方は大打撃を受けた。国ではこれ等の地方の稲作を安定させなければ、という事で冷害試験地設置という施策に力を入れた。長野県諏訪郡原村(ハケ岳のふもと)、偶々そこの技術員であった岡村勝政さんは、保温折衷苗代の技術改良をされた方ですが、生まれが山梨県境の富士見村の農家、子供の頃から親のやっている高冷地の苗代つくりの難しさ、苦勞を見て育った。苗代の大切さ、と言う事は身にしみて感じていた。

自分が技術者として安定した苗をどうしたら作れるか、と常に思っていたといっている、志を同じくする人と人との出会いである。技術者の立場で行って見たら此れはいける立証を得た、試験場で発行している農業彙報に発表し、本場でも取り入れて欲しいと願ってみても、一介の下級技術者の意見など、取り上げて貰えなかったと言われている。

私の記憶では、偶々寒冷地の水稻に対する水温調査に来県した近藤先生が、諏訪で行なっているのを見て、軽井沢の荻原豊次が考案した苗代である言うことを知り、家へ訪ねてこられたと思っていましたが。信州の人脈等によると岡村さんが、権威者に是非見てもらわなければ、と言う事で近藤先生をお願いしたとの事である。この方は寒冷地稲作の権威者であった(農林省技官後農工大学長)。

その時の様子が当時の文献に書かれているわけですが、実物を見、栽培方法を聞いた時「うーんと」、うなったきり・・しばらく言葉が出なかったと言う。「此れはえらいことだ、えらいことになった。此れは素晴らしい、実に理想的な苗作りだ。我々長年研究を続けていた専門家が、今日まで何故、此れに気付かなかったのか、実に恥かしい事です」と言われたと記されておりますが、父豊次を訪ねたときも同じような事を言われたことを記憶しています。

父親豊次にしてみれば正直言って何か理想的で素晴らしいのか、解からない。色々してきた結果こうしてみたら苗が作れる様になったに過ぎない。専門家が理想と言うのは最初は畑状態で、・・酸素の供給が良く根の発育を促し、必要とする温度は油紙で保温する、・・温床苗代で一番ガンとなっている立ち枯れ病を、後でかん

水と言う水苗代にすることで防止する、今まで誰も考え付かなかったことだと言う。

兎に角、学者より科学的裏付けされ、技術者によって技術改良が加えられた。岩手県水沢市農協の保温折衷苗代三十年史等を見ても、最初に発表紹介したのが当時の農業新聞、次に農業及び園芸（これは高度の農業技術専門誌）で全国に紹介された。其れによって見よう見まねで試験機関、先進農家が取り組んだ。

通常各地域の試験機関、指導機関は、新しい技術を一般農家に普及するのには、最低3年は試験研究して、これで良し、と言う段階を経なければ普及に乗り出さない。所がこの苗代は、行ってみた者の反響が大きく、それらの人々によって、指導機関がしりをたたかれ動かされていって、岩手県などは、翌年から普及活動に乗りださざるを得なかったとしている。新しい技術は、いくら指導機関で奨励しても一般農民はなかなか乗ってこない、広まらないとされていた。此れには農民と言う者は、自分の方法が一番であるという農民特有の頑固さ、貧しさの中で社会的抑圧されてきた無智さもあるが、何と云っても、もし失敗したら二度と立ち上がれない、一家の生活が懸かっているというより、命かかっていた。迂闊には新しいものには飛び付けないと言う実情があった。

併しこの苗代は、やって見たら収量がある。一般農家が正確に収量調査をして、どれ位取れたか、等、いちいちやっている人は殆んど居ない、他のものと比較して一割以下の収量差であつたら、目でみた位ではっきり判らない、目で見てはっきり判る位になれば、二割以上の増収である訳であり、・・苗立ちも良いが目に見えて収量差がある、それに、米にしてスリ（重量）がある。人から人への噂も手伝って、大勢の人が取り組んでいった「保温折衷苗代、此れほど急激に宏まった技術は、農業史上例を見なかったと言われ、静かな水面に投げ込まれた石によって、えがかれる波紋のように。また、燎原の火のように、広がっていった」とも表現されています。

東北地方に通し苗代（苗代の為に前年肥料を撒き苗代作りのためだけに、何も作らず水田を空けておく。）というものが、1万3千ヘクタールもあった。戦争中、食料不足、なんとか稲を作らせようと、指導機関が努力しても解消しなかった（それほど寒冷地の荷作りは難しく大事なことであった）。併しこの苗代で、それが忽解消されたという。

新潟で普及活動に携わっていた一技術員は当時の農業誌に次のような、寄稿文を寄せている。冒頭に「豊作は自然がもたらすものでない」・・・感動に満ちた一説をのせ・・・苗半作と言われながらも、春先の気候は毎年悪く多かれ少なかれ、決定的障害を受けていた。東北方面は雪深く、雪解け水を利用しなければならない、北陸は勿論、山間高冷地の稲作農民は、苗ぐされだ、苗立ちが悪い、最後に

苗不足と、計画的田植えが出来ないという毎年毎年自然の支配の下に、どうにも人力ではやりようが無かった、今年も不作だ、やれ凶作だ、と悩まされ続け、其れが宿命的のものであった。偶々順調な生育を遂げれば、天候の賜なのだと豊作を謳歌していたものである。

当時誰もが、心に深く期待されたものは、天候が悪くとも負けない米作り、悪天候に打ち勝つ、安定した稲作経営、…これが農家の等しく求めていた希望であり念願であった。爾来十有余年、関係者一致協力して努力を続けて来た、最も困難とされていた、不安定な水苗代による苗作りが保温折衷苗代の普及によって、健苗が出来るようになり稲作が安定する様になった。「豊、凶は自然に支配されるのみでないと、お互いが確信を待って処するようになった」と結んでいる。

米所新潟県と言われていたが、湿田、冷水田、秋落田、不良田が多く、積雪寒冷地で春先の天候は、不良気象、苗代期気温低く冷や水の灌漑等、建苗育成は苦労があった。

更に秋は多雨、低温、早冷、水稻の冷害現象は宿命的の様に襲来した。「稲が健全に生育する素質があれば低温のときにでも、良くそれを堪え得ることは事実であった」としている。

敗戦そして食料不足、国を挙げての食料確保。当時普及員制度が発足し、縁の自転車、普及員は保温折衷苗代と同時に発足、日本の食糧難を救ったと言っても、敢えて過言で無いと言われている。又国に働きかけて苗代の油紙代に助成金をだす。

昭和28・9年の冷害に、大きな効力を発揮したということで、更に普及を図る為の、5ヶ年間の時限立法が施行される。「水稻健苗育成施設普及促進法」…「単独技術に対して、法的な措置が講ぜられた事は、ほかに例を見ないことであり、如何にこの苗代技術に対する評価と期待が大きかったかを示すものといえましょう」と当時農林省の農産課長鈴木諒氏が、岩手県水沢市の保温折衷苗代三十年を顧みてに、寄稿されているその背景には長野県の苗代代議士と、異名を敢ったとまで言われている程、熱心だった、吉川代議士等の御活躍があったことを忘れてはならない。

日本人の知恵は素晴らしい、と言うのは…この苗代を稲作の全てに応用して行ったことである。

寒高冷他の安全な健苗育苗として生まれたこの苗代が

1. 晩生多収品種の導入
2. 植え付け収穫時の労働力の分散
3. 秋落ち田の解消
4. 常襲、台風地帯の早期収穫による回避

5. 二期作、及び裏作導入

6. 稲作の北上

この苗代の、特性を生かしこの様に活用された結果・・・驚異的な米の増収に繋がっていったのです。

もう一つ忘れてはならないものに、一般農家の意識改革があると思う。普及員さん達の努力、指導力の大きかった事（農家と指導者とがこれ程密着して行われたことは、嘗て無かった。・・・風乾重などの、言葉は私なども初めて耳にした言葉であった・・・ただ苗が間に合えさえすれば、只苗さえ植えれば良いということから、収量を上げる為には根の充分発育した苗が、如何に重要であるかと言う認識を高めた事であったと思う、・・食料の無かった事もあったがこの苗代を契機に、農民の科学的、技術的関心、熱意の高まったことを忘れてはならない。

保温折衷苗代の稲はどうして収量が多いのか、と色々専門家が研究した。この苗は、下位分けするからだと言う事が判った。本の茎より二番三番の他の方が充実してて収量が多い、のだという。「頭の揃った稲株を株元から手でコイテ来て他の所でひっかかるような稲が、取れるんです。」よく豊次がそんな説明をしていた記憶がある。

豊次は訥弁で、話は家族の者が聞いていてもハラハラする様でした。食料難の時代であり農家の人々も、真剣に一粒でも多く取りたいと願い、稲作に打ち込んでいた時代でしたから、毎日の様に県内は勿論全国から大勢の人が研修に訪れた。

昔家で多少の広間はあったが、大勢のときは父が縁側に座り、研修者は前庭に座って聴いてゆかれた。また農閑期には講演にと、方々で頼まれた。・・・安曇野へ、雪の飯山などでは行き先で大雪に遭い閉じ込められて、帰ってこられなかったという、逸話もあり、遠く九州熊本から紹介があったのには驚きました、何故九州からと思ったら、阿蘇山麓等の高地があつた。

昭和28年、農林大臣賞表彰後、明治大学大講堂で、専門の学者、技術者を前にして一介の百姓が、どんな話をしたか・・・講演を頼まれれば、断ることも出来ず、出向いてゆきました。

何回やっても、持って生まれた話べたでしたが。・・・むしろ其れが却って聞く人の心に残り、受けたようであり、雄弁に語られるより、やはり土に生きた農民らしく、ありのままに語るそのものが尚かえってよかったようでした。

今日本で我々の口を潤している米は、西か東かどちらで取れるでしょうか？・・・、米は元々暖かい地方が原産ですが、保温折衷苗代により、寒い地方でも高収量を上げることが出来るようになり・・・、戦後は西より、東日本が米の産地となる、・・長野県、岩手県だの、今まで米の輸入県が輸出県となる。・・米の収量は一躍三倍になったと言われ、反当収量に於いては世界一である。

戦後のあの厳しい食料難を救ったのは、保温折衷苗代と品種改良であると言われていますし、尚今日の日本経済の発展の基礎を作ったともいわれています……。当事わが国がいち早く工業立国へと踏み切れたのも、どうにもならなかった食糧難から、食糧確保の見通しが付いた、からであるといわれています。

この苗代も一様国内で普及を見た後、韓国で普及するので、苗代の映画のフィルムを借りたいという話もありました。

私の家の前にクリニックを開業した医者がありますが、ビルマへ旅行したら、向こうでやっていた、日本で発明した技術だと言っていたがお宅さんでしたか、と言い、群馬に高島さんという県会議員の方が居られますが、カナダへ視察に行ったらジャパニーズ荻原と、保温折衷苗代を紹介されて驚いたと言っていました。

只今機械田植えの時代、稲作も時代と共に変わってきました。保証折衷苗代も忘れられてゆく時代ではありますが、現在の育苗でも、保温して苗作りすると言う原点は生きているわけであり、此れこそ農業の発展史の中で、見落としてはならない重要事跡であると思う。

長野県に農業経営士という先進的農業者に贈る制度がある。たまたまその認証式に参列したとき、任命された青年が、県知事等の祝辞の後の、答辞の、冒頭の言葉に「長野県は保温折衷苗代に見られるように、誇るべき先覚者、学ぶべき民間技術発祥の地である。私達も創意と、工夫により、この厳しい農業情勢に打ち勝ち農業経営を確立します。」との決意を述べられたのを聞き、後を継ぐ若い人たちに、心は受け継がれていることを、感じた次第です。

最近農業委員の研修旅行で、和歌山県へ行きました。旅館で仲間が、トイレに行った、偶然あった人に軽井沢だというと、軽井沢ならこういう人を知らないかと聞かれた、今その息子がここに一緒に来て居ると答えると……是非お会いしたい……大学で保温折衷苗代の勉強をして、卒業後九州で普及活動した一人であるといい、その子供さんに達えるなんてこんな嬉しい事は無い、今、日本の農業は大変な時代を迎えているが、お互い頑張りよう……是非これを皆さんで飲んで欲しいと言って、旅館を通じ酒の差し入れをしてくださり、恐縮した思いがある。……当時東北、北陸へ旅行すると農業関係者からは、必ず感謝の言葉がかえってきた。

NHK早起き鳥の放送・大地に生きる……一粒のモミ・昭和48年4月2日より4月28日まで……放送録音が、小学校の道德教育に利用されたと言う事で……徳之島の小学生から懸想文が寄せられてきた。子供なりの感動、感謝の思いが込められている。

今、米は有り余っており飽食の時代だと言われております、食の有り難さも忘れがちであり、……極端な人は、日本で効率の悪い、高い米作りをしなくても、アメリカ

から持って来ればよい、とまで言われています。戦中、戦後のあの食料難、のどもと過ぎれば……（今私の家の国道沿いに立派な頌徳碑を立てていただいています。これは全国稲作農民の、感謝の一握りの粃掘出運動により、建設していただいたものと聞いております。（水苗代当時は寒冷地では、一坪当り粃を多いところでは1升から1升2合位播いた、育たない分を見越して余計播く、それが保温折衷苗代ではせいぜい2、3合播けばよい、その余った粃の量だけでも多大なものだった。其れが儉約でき、その上米が安定して多く取れる、こんな有り難いことはない、と言うわけで1軒約粃2合分位の金額であったという）

勿論地元町が中心になり町長始め農業関係の方々の御労苦の賜物ですが、軽井沢は国際観光親善文化都市、有名人との交流が深く、揮毫、詩文も、スムーズにお願いできた、参議院議長河合弥八さん、文学博士中山久四郎先生であった。

詩文の冒頭に、農は食の本にして国の本成り、民は食を得て安く、国は農によりていやさかとなる、地球上尊農の国あり、我が日本は其の一にして瑞穂の国の美名あり

…と深く刻まれている。

当時大門（小県郡長門町）の河原から自然石を選び出し、…運搬、建設機械力も無い時代、営林署の土場（木材置き場）から長い材木を借りてきて、三角柱をくみ大石を吊り上げる…多くの人に大変なご苦勞を頂いたわけですが、此れは私ども一族の家宝のみならず、日本の農業史を後世に伝える大切な文化遺産でもあらうと思えてならないのです。

さて最後となりましたが、農業には新しい品種を育成するのに、最低10年の歳月がかかる、育種目標に従って、単調な選抜作業が繰り返される、その選抜にはイネへの深い理解と、綿密な調査、更に鋭い勘が求められる。しかも交配する時10年後どのような、イネが求められるのか、先を読んでかからなければならない。育種は常に先輩の苦勞した遺産の上に成り立つ、前の品種が無ければ新しい品種はうまれない。

農業は、私共人生に教えるところが非常に大きい。

私共農業経営士は、年2回位、佐久、または上小、南佐久合同で、農業問題についてシンポジウム、意見討論会が行われる。…そのときの分科会の席上、或る青年が、今時の親たちは時代遅れであり、今は時代が違うんだから、親の言うことは聞かなくてもよい、と、はっきり言う。…私は直ぐムツとする方なので、思わず「この野郎一人で大きくなったつもりでいるのか」、と、反論してしまった。ところが、最後の合同集会で大勢の人々の集まっている席上、軽井沢のこういう人から言われたけれど、納得の行くよう説明して貰いたい、と発言され…、咄嗟の事、…話しの馴

れない私はえらいめに遭ったことがあります。無中であつたので何を言ったか判りませんが、

・・・「皆さんは農業では先進者あり、地域の指導的立場にある人たちです、貴方は親の全てを否定されましたが、親は親なりに永い人生自ら歩んで培ってきた体験から、現代への想い、努力があり、今を築いて来られている筈です。

一本の木に喩えてみても、確かりした根があり、幹があり、枝があつて、始めて立派な木が形成され、永い間の風雪に耐えて来てこそ立派な木とになっている・・・あなた方は頂上に茂っている若枝だと思っておられるでしょうが、幹まで取り除くような事をしたら、本も子も無くなってしまう、悪い枝は切り落とし新芽を吹かして欲しい、しかしよい枝も有る筈だ、よい枝は大事に伸ばして行かなければ、・・・」
そんな意味の事を言ったと思う。

本日此処にお越しの皆様は、永い人生自ら歩んで体得した、生活の知恵とも言うべき貴重な財産をお持ちの方々です、健康には充分留意されまして、次代の若者にその財産を惜しみなく引き継いでくださいます事を願って、拙い話を閉じたいと思います。

岩手県水沢市農協の方が、保温折衷苗代三十年を顧みて、という本を作って送って下さいました、昭和52年11月23日、豊次の没する3ヶ月程前の事でした。

組合長、千田祐寿氏が

・・・保温折衷苗代が考案されない前の、苗作りは、農民にとっては如何に真剣に取り組んだものか・・・そして如何に苦勞し、心配したものかを知る人は年々極めて少ない人数になってきています。当時、苗代(水苗代と言った)の失敗、苗不足は、稲作農民にとって致命的な打撃で、毎年何処かで自殺者が出る程の重大な事だったのであります。保温折衷苗代の出現は、正に画期的な変革であり、今日の田植え機の比ではないと思います、尚これがきっかけとなってマルチ栽培が生まれ、次から次へと新しい考案がなされています。これから先農業生産上色々改善が進められて行くでしょうが、保温折衷苗代はその大きな出発点になると思われます。・・・と、冒頭で記述しており、又編集委員の朽本たけし氏が、

・・・日本の国に油がなくなって日本中の田植え機が全てストップ又保温折衷苗代の苗を、手で植えると言う事が再び来ると言う事は到底考えられないが、後世において保温折衷苗代の奨励の段階に於いて、文献等では見られない当時の状況を知る資料として残したい・・・

旨をあとがきで結んでいます。・・・当初、私はこの本を作りたいという話を聞いたとき、今、米は減反減反と言われているのに、随分物好きの人も居るものだ、位の気持ちでした。

ところが、その後、朝日新聞で農業担当の編集委員をされていた、山本文次郎氏（京都大学文学部卒、朝日新聞経済部、政治部を経て農業担当。退社、現、農政審議会委員、農政調査委員専門委員）から「米の履歴書、品種改良にかけた人々」という著書を恵贈して頂き、其れを読むことによって東北の稲作の実態、歴史を知る事ができた。

昭和初年の凶作（昭6、7、9、10）、昭和9年岩手県凶作史、小学生の作文を読むと、徳川時代じゃ在るまいに、そんな事が本当に在ったのかと想える位、米の取れないと言う事は悲惨であった事が偲ばれる。・・・東北の稲作農家は、現在のように産業は発達しておらず、他に働く所もなく殆どの人が米のみを頼りに生きてきた。その米が取れなかったら、餓死するか、命を保つために身売るしかない、今では考えられない事が本当にあったのだ。

水沢市の皆さんがこの記録を、敢えて後世に残そうとされた気持ちが、よく判りました。

普及の過程で先駆けた、という誇りもあったでしょうが、お互い共通の痛み、苦しみ知っているからこそ、良いことは進んで他の人にも分け与えて行かれた事と思われるし、苗作りの難問打開、命をかけた東北の稲作りに、自分からが先駆者として歩んだみちを・・・水沢市、いや岩手県の農業史に残して置かなければならない・・・の一念あったからに外ならなかったと思います。

私も子供の頃、千ヶ滝へ行っており、戦前の別荘族の様子は子供心によく覚えていますが、戦前は我々一般人とは、大きな格差がある人たちばかりでした。雲の上の存在の人であり、女中（お手伝いさん）の1人や2人位は殆どの人が連れて来ていて、中には6人も連れてきている人がいました。

何故か女中さんたちには東北人が多かった、「ネーヤ、ネーヤ」と気に入られ、「この子は良い子だから、うちから立派な嫁にして出してやります」とまで言っておられる方もありました。

其れも其の筈、本当に食うに食えない、厳しい東北の農村出身者、辛抱強く、苦勞を借しまない、気に入られるのが当然でありました。私も農村史を学ぶことで・・・後にこれらのことを知ることが出来たわけです。

本当に凶作続きのときは此の儘でいれば、子どもの餓死を待つか、よそへ売っても其の子の命を救うか、という親の切ない選択。急行列車が岩手、青森間の山中へ、捨てる汽車弁の空き箱に、群がるカラスではない子供から・・・此れは遠い昔の話ではない、そんな時代の、実際にあったことを改めて振り返ってみたいものである。

私も太平洋戦争の時、海軍航空兵特攻隊として、一命を拾ってきた一人ですが。当時、私共フィリピン、レイテの、決戦要員として猛訓練を受けました、司令（藤田

中将)が、「先に行って、基地を設営して待っているんで、お前だらけ確り訓練をして後から来るように」との訓示を残して飛び立った、それが台湾沖で撃墜され、又戦局の急変等でレイテ作戦に参加出来なくなり、香港基地に行く事になった。戦局は香港、台湾を飛び越えて沖縄へ行ってしまった。お蔭で命拾いをする事となった。同期の仲間等は、内地、南九州、沖縄近辺に居た者は、殆んど突入してしまったと言うのに。・・・しかし戦後知った。英国の作戦計画によると、後10日終戦が遅れていれば香港奪回作戦を行ったとのこと。・・我々は真っ先に爆弾抱えて突っ込んでいかなければならない身であった、本当に運が良かったと思う。

敗戦、英国・・・8月30日入港・・・日本軍降服。・・・今まで英国邦人関係者を収容していた、捕虜収容所に、今度は我々が収容されることとなる。

極端に食料が少ない、水の中に僅かに固形物が入っている程度、日に日に痩せていく、身体は弱って行くが、捕虜の身でありどうする事も出来ない・・・余りにひどかったと思っていたら、英国が、人間、食料欠乏の最悪の時、どの位のカロリーを摂取していたら命を保てるか、という軍事研究材料に、我々がされたのだと、いうから堪らない。

人間、腹が減ると、体を動かせないばかりか、夜眠れない。骨と皮ばかり、セメントの上にむしろ一枚、毛布一枚、身体が痛くて堪らない、故郷へ帰りたい思いと、あちこちから、聞こえて来るため息だけ、米俵を叩いて、やっと落ちた15・6粒の米粒を大事にポケットへ入れ、夜中に其の一粒一粒を丁寧に噛んで寝る・・人間その様な局面に遭うと生への執着は、異常に強くなる、生きたいという事を必死で考えるようになるものです。此れはこの様な境遇、体験を経た者のみの知る事であろうかと思えます。

食べる物さえあったら、腹いつ杯食べさせて貰ったら、俺はどんな苦労も厭わない、どんな事でもやる、と思ったものです・・・併し人間、「めんども過ぎれば熱さ忘れる」という諺もあります・・あれ程、飢えの苦しみを知らされた者でも、時が過ぎ、環境が変われば時として、あの当時のことは、忘れられて行く様な気がしてなりません。

私共生きていくうえで、無くては成らないものが食料である。食の尊さ、大切さを思い起こすと共に、其れを支えて来られた人々に、尊敬と感謝の念を忘れてはならない。